

神奈川大学21世紀COEプログラム  
「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究成果報告書

Report on the Results of “Systematization of Nonwritten Cultural Materials  
for the Study of Human Societies” Kanagawa University 21<sup>st</sup> Century COE Program

# 日本近世生活絵引

北陸編

Pictopedia of Everyday Life in Early Modern Japan  
compiled from *Nogyo Zue*

神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

The Kanagawa University 21<sup>st</sup> Century COE Program Center

# まえがき

日本の近世は「農書の時代」とも称されるように、実に多くの農書が全国各地で刊行されました。この背景にはもちろん識字率が高まり、多くの人が文字を通して知識や情報を得るようになったことがあります。それ以上に農民の創意工夫の努力が情報を求めていたことも大きな理由です。農書はもちろん読む本です。しかし、知識や情報を必要とする人が総て直接農書を読むわけではなかったと思われまゝ。誰かが農書を読み上げて、それを聞くことで内容を理解するという方が却って一般的だったと思います。さらに農書を読むのではなく、見るということも行われたと思われまゝ。多くの農書が挿絵を挿入して、説明を具体化しております。挿絵の比重は次第に高まり、図像中心の農書も編まれるようになりました。

北陸地方でも少なからずの農書が編纂されましたが、その白眉と言うべきものが土屋又三郎の『耕稼春秋』です。この内容豊かな農書に対応するように図像で描いた絵農書があります。神奈川大学日本常民文化研究所には、同じく『耕稼春秋』と名付けられた絵による農書が所蔵されております。そこでこの『耕稼春秋』を対象に絵引編纂を構想しました。この『耕稼春秋』とほぼ同じ内容の書物が『農業図絵』の名称で『日本農書全集』第26巻として刊行されております。それと比較しますと、描き方や描かれた事物を子細に検討しますと、荒さが目立ち、絵引の素材には不向きであることが分かってきました。そこで、『日本農書全集』所収の『農業図絵』を用いて絵引を編纂することにしました。

絵引は、周知のように、濫澤敬三が字引に対する語として創り出した語です。絵を窓口にして、そこに示された事物や行為の名称を示し、また意味を解説する辞書が絵引です。私たち神奈川大学21世紀COEプログラムは、事業の柱として、先輩たちが完成させた『絵巻物による日本常民生活絵引』を継承発展させる事業を設定し、取り組みました。その一つが『日本近世生活絵引』の編纂です。日本の近世に描かれた図像資料に基づき、絵引を編纂するというもので、北海道編、東海道編、そして北陸編が計画されました。本書はその北陸編です。

『農業図絵』は、その書名が示すように、農業を描くことに中心がある書物ですが、金沢城下の生活も描かれ、百姓だけでなく、町人や武士も登場します。それら多彩な人々の暮らしぶりを切り取り、絵引編纂を行いました。今までになかった試みです。編纂にあたっては種々工夫をしましたが、絵引として完成の域には達しておりません。私たちは今回の絵引を試案本と称しているのはそのためです。本書を利用して問題を感じられましたらその問題点を忌憚なくご指摘いただきたく願います。建設的なご意見を頂戴し、よりの確な絵引へ進みたいと思います。

絵引編纂の底本としましたのは『日本農業全集』第26巻所収の『農業図絵』です。利用にあたっては、社団法人農山漁村文化協会、また、『農業図絵』を久しく研究され、農書全集に収録するにあたって校訂された清水隆久氏、『農業図絵』原本の所蔵者である桜井健太郎氏はじめ関係者の皆様のご親切なご配慮を賜りました。ここにあつくお礼申し上げます。

2008年2月

神奈川大学21世紀COEプログラム第1班代表  
福田 アジオ

# 日本近世生活絵引

## 北陸編

### 目次

凡例	.....	i
序	.....田島 佳也	1
<b>I 金沢城下と近郊農村</b>	.....	3
1 金沢城下の武家屋敷と町屋へ糞尿肥貰いに	.....	4
2 金沢城下に門付けに行く春駒と肥担桶を駄馬で運ぶ百姓	.....	6
3 正月の挨拶回りに忙しい武士たちと僧侶	.....	8
4 犀川大橋を渡る武士団	.....	10
5 犀川大橋際の商店街と道行く越前万歳師や町人家族	.....	12
6 金沢の片町に行く駄馬と肥汲みの百姓	.....	14
7 南町から武蔵辻街道沿いの正月風景	.....	16
8 金沢城を下城して浅野川大橋へ向う武士の行列	.....	18
9 城下町郊外に行く人びと	.....	20
10 田に踏土（土肥）や下肥を運ぶ	.....	22
11 春、馬犁（鋤）耕などに勤しむ百姓と花見を楽しむ家族	.....	24
12 山から刈り草を運搬する牛と童	.....	26
13 稲蔵入り後の小祝い	.....	28
14 犀川下流域の漁撈	.....	30
15 年末の農家の洗濯風景	.....	32

Ⅱ 金沢城下をゆきかう人びと .....	35
1 武士	
(1) 浅野川大橋に行く藩士の一行 正月 .....	36
(2) 町角で 正月 .....	38
(3) 待機する若党・小者ら 12月 .....	40
2 僧侶	
(1) 寺町寺院群辺りに行く僧侶の一行 正月 .....	42
(2) 僧侶の一行と酔っぱらい 正月 .....	44
3 町人	
(1) 町角で 正月 .....	46
(2) 役者と文人 正月 12月 .....	48
4 女性と子ども	
(1) 揚げ羽根をする娘たち 正月 .....	50
(2) 雪だるまを作る子どもたち 正月 .....	52
(3) 鉾を手に掲げる女性 正月 .....	53
5 芸能・卑賤の民	
(1) 鳥追 正月 .....	54
(2) 節季候 12月 .....	55
6 百姓	
交易 10月 12月 .....	56
解題 .....	田島 佳也／泉 雅博 59
参考文献目録 .....	63
索引 .....	65

- 1 本書は『日本近世生活絵引』の1巻、北陸編である。
- 2 本書は、土屋又三郎『農業図絵』（日本農書全集第26巻（社）農山漁村文化協会 2005年6刷）の挿絵から、主に加賀前田藩の城下町をゆきかう人びとやそこで生活する人びとの描写から30の描写を選択し、郊外の御供田村で農業や娯楽にいそむ人びとの描写から5の描写を選択した。そのうえで、文字説明、その他不要と思われる部分を除き、図像として描かれた事物・行為に番号を付け、それらを表現する語をキャプションとして与え、また図全体を読み取り、解説した。
- 3 北陸編ではⅠ部、Ⅱ部の編成とした。Ⅰ部は「金沢城下と近郊農村」、Ⅱ部は「金沢城下をゆきかう人びと」である。Ⅰ部では『農業図絵』に描かれた挿絵の流れにそって、Ⅱ部では1武士、2僧侶、3町人、4女性と子ども、5芸能・卑賤の民、6百姓にグループ分けして、図絵を配列した。したがって、Ⅰ部は図絵の主題に基づく章などの編成替えをしておらず、Ⅱ部は試論的に図絵の主題に基づく章の編成替えを試みた。
- 4 一つの図とそれに対するキャプション・読み取り解説を原則として見開き2ページに収録した。したがって、対象の図の大きさによって、拡大もしくは縮小しており、原本の大きさとは一致しない。なお、図は必ずしも原本の描いた範囲ではなく、必要に応じてトリミングをし、また詞書きなどは消去してある。
- 5 各図に付ける番号は、以下の原則のいずれかによった。
  - a その図像に与えたテーマに即して、テーマに近い事物から周辺的な事物へと付ける。
  - b 遠近法に従い、図像の中の近いところから遠いところへと付ける。
  - c 描かれた図像内容の時間の展開にそって付ける。
  - d 右上から左下へS字形に付ける。
- 6 番号に対する語の記載に際しては、まとまった全体についての語の場合は○を、また行為を示す場合には□を、それぞれ番号に付けた。
- 7 各事物・行為に付ける語は、以下の基準によった。
  - a 原則として事物単体にキャプションを付ける。
  - b 名称は図像が描かれた江戸時代の表現・表記を優先させ、カッコ書きで補記した。
  - c 所作・行為のキャプションは現代語で付けた。
  - d 推測・推定・想像によるキャプションはできるだけ避けるように心がけ、推測・推定・解釈に及ぶことは読み取り解説で記述した。しかし、厳密ではない。
- 8 本書の編纂は共同研究の方式で行われ、研究参加者で検討したが、各図の読み取り解説については個人の責任で執筆した。Ⅰ部は田島佳也、Ⅱ部は泉雅博が読み取り解説をした。
- 9 本書編纂過程で獲得した知見は各人が解説のなかで記述した。
- 10 文末にはキャプションとして付けた語句についての五十音順索引を付した。
- 11 『農業図絵』の『絵引』化にあたっては、次の方がたのご協力とご教示をえた。  
 伊藤玲子 桜井健太郎 清水隆久 新藤彩 関根梨紗 長島淳子 新原淳弘 平岡諒子  
 本谷英基

日本常民文化研究所では研究所の創立者、澁澤敬三が同人を集めて『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻を作り、刊行した。1954年のことである。

発想の源泉は字引に習って「絵引は作れぬものか」というものだった。そこで敬三は研究所に民俗学・歴史学・民具学などの研究者を集め、日本中世の絵巻物などを対象に、描かれている図絵をアットランダムに切り取り、研究会を進めながら「凡そ常民的資料と覚しきものだけを集め」て事物や行為などに番号を付し、名称をつける作業を進めた。

澁澤の『絵引』作成の思いとは「民俗学の中でもマテリアルカルチャーの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解りにくい面をはっきりさせる点で誰でもいいから一度は完成して置くと後から勉強する方々の助けになる」（『新版絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻ix頁 1984年）というものであった。

歴史研究はこれまで文献資料に中心が置かれていた。とはいえ、歴史的基礎的考察においては研究者各自が史資料や図像資料などを活用し、さらに村方の研究などで聞き取りなどを行って史的イメージの構築に努めてきたことはいうまでもない。ただ、その図絵資料の批判的活用方法が確立されていなかったために、正面から取り上げられることが少なかっただけである。歴史教科書や歴史読み物、歴史研究書にも図像が掲げられているが、それらは記述に関係なく挿絵されているのではない。読者に視覚的に訴え、記述内容の理解を助ける、あるいは歴史的イメージを補完するために挿絵されてきたのである。ただし、挿絵についての解説・記述はきわめて簡単で、挿絵そのものの分析も少なかったといえる。地図や図絵、絵画、写真を積極的に歴史研究の対象資料として読解・活用する動きが出てきた現在でも、

それほどの変化はない。しかし、近年、着実に変化は起きてきている。時代状況の把握や情報発信の装置として地図や図絵、絵画、写真を積極的に歴史像構築の材料として活用する動きが顕著になっている。それはテレビやパソコンなどの影響から、映像や絵画資料などを視覚資料として多用するようになってきた社会現象と踵を一つにする動きと関係しているように思われる。また、来館者の視覚に直接訴え、理解の一助にしようとする各地の歴史博物館の動向などとも、それは関係するかもしれない。

しかし、図絵や絵画などを歴史資料として縦横に活用する手法は満足する程度までにまだ達成されていないのが現状である。それは描かれた図像の事物や行為を厳密に把握し、それを正しく解説することが現在の研究蓄積では非常に困難だからである。とくに、それは民衆生活の事物全般に跨っている。これまでの政治史や制度史の研究の進展に比べて、庶民の生活文化にかかわる研究が少ないことにそれは原因する。庶民が時代時代でどんな道具を使い、何を身につけ、どんな慣行や規律のもとで仕事や生活をしてきたのか、またそれらが地域々々でどのように異なっていたのか、そのときにどんな英知を絞ってどのような工夫をしてきたのかなど、庶民の最も基本的な事柄でさえ判らないことが多々あることである。それは時代が遡れば遡るほど史資料が少なく、当然であろうが、それに比例して不明なことも多くなる。明治・大正の時代でさえも、一部写真などの映像記録があるとはいえ、不明なことが多い。ましてや、江戸時代においてはなおさらである。庶民生活に関わる研究が非常に乏しいことが『絵引』の試作をしてみて痛感・実感させられた。

戦後の1960年以降、歴史学研究において民衆史研究が隆盛したこともあったが、これらの基本的な

事柄の研究がなされないまま、あるいはこれらの研究の深化のないまま歴史研究が行われてきたことにそれは原因があると思われる。神奈川大学が21世紀COEプログラムの一つの柱に据えた『日本近世生活絵引』編纂の試みは、大言壮語的にいえば、こうした状況の克服の意味も含まれている。

本書は中世の絵巻物による絵引、『絵巻物による日本常民生活絵引』を基点とした『日本近世生活絵引』の北海道編、東海道編につづく北陸編である。18世紀の加賀藩城下金沢とその近郊農村に生活する人びとを描いた土屋又三郎の『農業図絵』を題材にした『絵引』である。この近郊農村とは御供田村までのことだが、現在は金沢市内に埋没してしまった地域である。ただ、御供田村の鎮守社が形を変えながら今も残っており、かろうじて昔の縁を偲べば偲べる地域として残っているにすぎない。

本書では『農業図絵』を題材にしながらも農村の様子をあまり絵引にしなかった。というのも、百姓たちの服装など調べてもなかなか解らないことが多かったことによる。『絵引』化に挑戦しても、基礎となる研究・文献が乏しいということにあった。過去、これまで経済史などをふくめた歴史学、とくに農業史では目覚ましい研究があり、その成果が農業発達史調査会編『日本農業発達史』10巻、別巻上下巻（中央公論社刊 1953）などとして刊行された。しかし、当時の明治以来の日本の農業生産力問題とその発展如何への関心との関係から、その内容は農家経営、行商人などによって持ち込まれた農具などの研究に関心が注がれ、農民たちの衣食住を含めた生活実態の解明・追求には及ばなかった。農業発達史調査会に結集した研究者たちにとっても、それらのことは関心外であったに違いない。農民たちの衣食住の研究についてはその後、民俗学などからの追求があったが、十分とはいえなかった。

かかる状況のなかで『絵引』化をすることは相当の専門家集団を編成し、研究会を開き、時間を掛けてじっくり取り組まなければ達成できないことは明らかであった。しかし、その余裕はなかった。海外とのあり方を比較しつつ、後継組織などでじっくり取り組むべき課題である。

『日本近世生活絵引』の作成作業中、取り組むべき課題が多く見つかったが、とにかくスタッフが時間の制約のなか、現在もっている力量を發揮して取り組んだ成果がこの『日本近世生活絵引』北陸編の試案本である。『農業図絵』の著者、土屋又三郎は絵師ではなく、十村役として農業体験をもち、むしろ農業の改良を百姓に指導する立場にあった人物である。土屋については解題でも紹介した。詳しいことはそこを参照していただきたいが、とにかく土屋はその点では農村、百姓を熟知した人物で、『農業図絵』は百姓の生活や年中行事、農事内容も良く知ったうえで書かれた得がたい好資料といえる。本書、北陸編はそれを試案本の形にまとめたものである。

それだけではない。『日本近世生活絵引』北陸編（試案本）としたのは、成果をまとめるにあたって数々の間違いがあるのではないかと危惧したことにもよる。また、多方面からのご批判、ご叱正を受け止めてより一層の正確さを将来に期すためでもある。絵引としての事項キャプションには重複もあり、事項事態も必ずしも多くはない。しかし、『日本近世生活絵引』として、できるだけ庶民の生活を取り上げるように試みたつもりである。

編纂作業は共同研究を基礎に『日本近世生活絵引』北陸編担当者が行った。